

クラウス・マンの闇と光 — 亡命小説『火山』をめぐって (その6) —

斎藤 佑史

はじめに

本稿では、クラウス・マンの亡命小説『火山』の第三部1章から第3章まで見ていく。第三部は、この長編小説の最後の部で、年代記としては1937年、1938年を扱う。これまで物語の舞台はヨーロッパであったが、ヒトラーのナチスの脅威の拡大に伴い、主人公たちがヨーロッパを後にしてアメリカへ亡命するに及んで、物語の舞台はアメリカへと移る。主人公たちとはアーベル教授とマーリオンであるが、その前にハリウッドスターを夢みてアメリカに渡ったティラ・ティボリの話がエピソード的に入る。

1

第1章は、まずマーリオンの母、マリア・ルイーゼ・カンマーのハノーファー時代の小学校時代の友達、歌手のティラ・ティボリの、ハリウッド映画スターを夢見て海を渡ってアメリカの地を踏んだ、希望と幻滅の物語から始まる。ティラ・ティボリが船でニューヨークに到着した際は、レポーターにインタビューされたり、ロサンゼルス新聞に彼女のポートレートが記載されたりして、将来大いに期待されているような希望を抱かされたのであるが、しかし現実には、長い間待たされて、女優としてハリウッド映画出演を正式に依頼されることはなく、彼女の夢は結局実現せず、幻滅に終わったのである。理由は主として40代半ばという年齢であったが、ティラ・ティボリは映画出演を待たされた間に、彼女と同様に出演を待っていたメキシコ出身の若い男と関係し、結局騙されるという憂き目にあい、最後は失意の内に彼女はマーリオンの母がいるチューリヒに戻っていく。

このティラ・ティボリのエピソードは、これに続くアーベル教授のアメリカ亡命物語を誘導する前置きのような役割を担っている。このアーベル教授がアメリカ行きを決意し、ヨーロッパの地で

いかにその準備を進めたかについてはすでに前の箇所で見えてきたが、¹⁾ 第1章の残りの部分は彼がどのようにしてアメリカに渡り、当初アメリカの地でどう過ごしたか、具体的にはニューヨークに到着し、招聘先のアメリカ西部中央の小さな大学へ移動するまでの彼のニューヨーク生活が描かれている。そこでまず彼のニューヨークまでの洋上生活であるが、サザンプトンからにニューヨーク行きの大きなイギリス蒸気船のツーリストクラスの船室に乗り込む。

彼はこの旅を楽しんだ。彼は海を愛し、昼夜を問わず海を愛し、海の静けさとその変化に魅了された…。海の眺めは渡航するこの人にとって大変な慰めであった。海が穏やかに息をしようと、激しく苛立とうと海は心と考えを脇へそらし、小さな心配事も大きな苦しみも解放する力を持っていた。そのような解放、そのような慰めがベンヤミンには必要であり、彼は海の眺めに感謝したのであった。

この引用文には、ヨーロッパの地を去り、アメリカへの亡命の洋上生活を始めたアーベルの心境がよく出ている。海の自然に触れることによってこれまでの地上生活の煩わしさから一時的であるにせよ、彼は解放されるのである。この洋上生活で、彼は誰ともほとんど言葉を交わさず、海を眺めたり、アメリカの歴史やディケンズの小説を英語で読み、またトルストイの「戦争と平和」やヘッベルの日記やメーリケの詩を読んだりして過ごした。孤独であるが、決して退屈しない至福の時間を過ごしたと言ってよい。ただしそれはニューヨーク港到着までの話で、自由の女神像が見えるほどにアメリカの地が近づくとは今度は言いようのない不安の念に彼は襲われるのである。その様子が手に取るように巧みに描かれている。アメリカの地が近づくにつれて、自分が現在置かれている状況、亡命者の身分であるということが強く意識され、また歴史学者の資質もあって、未来よりもまず過去のことをアーベルは振り返るのである。しかしいくら過去を振り返っても今の状況で何になるのかと自省し、「今何が始まるのか、人が前向きに生きようとするには、冗談を理解するようにならなければならない」と彼は考えたのである。冗談やユーモアとはこれまでのアーベルを見てきたものには、最も苦手なものに思われるので、洋上生活を終えてアメリカでの亡命生活に入る直前の彼の心境には興味深いものがある。

アメリカの地に上陸するにあたって、フランス人ビジネスマンやイギリス人行楽客に比べてドイ

テキストとしては、Klaus Mann: DER VULKAN Roman unter Emiganten, edition spangenberg im Ellermann Verlag, München 19.1977を用いた。なお、本文中にテキストから直接引用した箇所があるが、その注は煩雑になるので省略した。

1) 拙稿「クラウス・マンの闇と光—亡命小説『火山』をめぐって(その5)」経済論集 東洋大学経済研究会 第37巻第2号 2012年(12頁—15頁) 参照

ツ人亡命者たちの不安が強かったのは論をまたない。アーベルもアメリカの係官に対して神経質になったのだが、「万事オーケーですよ、教授！、あなたがここにいらしたのはよかった！ここは教養ある人に対してあなたの国よりも尊敬する念が強いですから」と思いがけない係官の言葉に顔が赤らむほど彼は驚いたのである。

何はともあれ、こうして無事アメリカに上陸したアーベルの亡命生活は、当初何事も彼にとっては珍しく思われ、まさに一種の異文化体験物語といった様相を呈していたと言ってよい。似たような体験物語を我々はすでに、アーベルの最初のアムステルダムでの亡命生活で見してきた。²⁾ただその時は、彼にとってドイツからの最初の亡命ということで、亡命と言うことが前面に出てきて、それに伴う異文化体験というものがその陰に隠れた感があったが、距離から言ってもアメリカは隣国のオランダとは雲泥の差があり、また同じ欧米と言っても、ドイツから見れば、文化的違いが大きいのと言わざるをえない。アメリカでの当初の亡命生活の描写に、亡命そのものということより、亡命に伴う、異文化体験の描写が多く、アーベルのいわゆる異文化不適應の要素が多くみられるのは、そのことを裏書きしていると言ってよいだろう。

…彼はニューヨークという都市には耐えられないと感じた。全てものが彼にとって異質であり、いくらか恐ろしいものだった。彼は、摩天楼が自分の頭の上に倒れて、同時に自分を埋め尽くしてしまうのではないかと、ぞっとして感じた。—とりわけ、この石の砂漠に木々がないのをさびしく思った。彼は喉の乾いた人が一口の水を求めるように幾ばくかの緑を渴望したのであった。

アメリカは言うまでもなく、当時最先進国として時代の先頭を走り、ニューヨークに林立する摩天楼はまさにその象徴であるが、この引用箇所はその圧倒的な力にアーベルが広い意味でカルチャー・ショックを受けている箇所と言ってもよいであろう。広い意味でと言うのは、このショックは、摩天楼は文化の力というよりも、文明の力を表しており、文明の差の違いをカルチャー・ショックとしてアーベルが受けているとも言えるからである。そしてそこで興味深いことは、実際にアーベルが文明の力の象徴たる摩天楼にエレベーターで昇り、高度恐怖症で気を失いかねない状況に陥り、「文明は野蛮に転化する」という感想を持ったことである。これはアーベルという学者が文明の力に対応できず、それに対して反感を抱かざるをえない彼の保守的な資質を示すものであるが、その資質は一方、注目すべきことに、文明以外のアメリカのもろもろの生活文化に対しても拒否的の反応を示していることである。例えば、カフェテリアやドラッグストアで立って食べる

2) 拙稿「クラウス・マンの闇と光—亡命小説『火山』をめぐって(その3)」経済論集 東洋大学経済研究会 第35巻第2号 2010年 (127頁—131頁) 参照

こと、豆を添えた魚、マヨネーズを添えたバナナ、チーズを添えたリングケーキなどは口に合わなかったし、甘辛い紙巻きたばこは彼の咳を引き起こし、至る所のラジオからやかましい音をたてているジャズ音楽は彼の癩に障ったのである。これらはアーベルの一種の異文化不適應の現象とも言えるが、異文化に接触すれば人は誰でも多かれ少なかれ、異文化不適應現象を示すのがふつうであるが、彼のような特にドイツ的保守性が身についた中年世代の人の場合は、アメリカ生活文化にすぐには溶け込めない様子が、ここでは異文化体験物語として生き生きとよく描かれている。作者クラウス・マンはこの章でその色々な場面を描いているが、そのうち二つを取り上げてみる。

一つ目は、アーベルが酔った勢いで夜になって訪れた、いかがわしいナイトクラブである。彼のような性格の学者にとって、それは少しでもアルコールがなければできない冒険であったが、彼が店に入った時は客はほとんどいなく、暇な女の子たちにたちまち取り巻かれる状況になる。その店のダンスフロアで女の子と踊れるのはいいが、ダンスタイムには踊るタイム毎に2セント支払わなければならないシステムであった。今ダンスフロアでは一組の男女が踊っているが、細い体で魅惑的な衣装を着けて、南太平洋の島からきたようなエキゾチックな様子で踊る女の子をアーベルはたちまち気に入ってしまう。しかし、彼の袖を引っ張ってまず声をかけてきたのは、ケルン出身のドイツ人のブロンドの女の子アニーであった。彼女は「おじちゃん」と呼び、彼に近づくが、彼のお目当ては先のエキゾチックな女の子にあったので、その女の子のことを尋ね、呼び出してもらおう。その女の子はロサンゼルス、母親はホノルル出身だという。アーベルはウィスキー3杯飲み、アニーはビール、そのエキゾチックな女の子は紅茶を飲みながらたわいのない話を続ける。その会話でアーベルは気分がよくなったが、その会話の時間17分もただではなく、彼にとってその額が高くはなかったことがせめての救いであった。彼が気に入った女の子が、彼にではなく、新たに店に入ってきた紳士に対して微笑みかけたとき、アーベルはそのナイトクラブを出たのである。このアーベルの話は、何ともお粗末なニューヨークの体験物語である。クラウス・マンはこの話を「これはニューヨークシティ、タイムズスクエアの彼の浮気であった」と最後に締めくくっているが、冒険にしては実りのない異文化体験とも言えるであろう。

二つ目は、ニューヨークに上陸して、3週間滞在し、次の目的地、アメリカ西部中央にある小さな大学に赴任する前に起こった事件である。これもたわいのない話と言え、たわいのないのだが、旅立ちの前の日の理髪店で起こったことである。アーベルは理髪店で髪を切ってもらったり、横になって髭を剃ってもらうことが好きだった。その日理髪店でラジオから様々な音が流れ出ていたが、最初はサッカーの実況放送の類の音で彼の耳には届かなかったが、別のラジオからジャズの音に混じって彼の心を揺さぶるピアノの音が聞こえてきたのである。ベートーベンの「月光のソナタ」である。彼はびっくりして突然頭をもたげたが、理髪師のピカピカのナイフが彼の首のところに当てられていたので、それは危険な行為であった。店側もこの状況を察し、他のラジオの音は消

し、店内を急遽「月光のソナタ」だけを響かせるように手配したのである。「何という恵み、—ああ、ボン出身の教授はどんなに打ち震えたことか」とクラウス・マンはアーベルの今の心境を記述する。ベートーベン、言うまでもなく1770年ボン生まれのドイツの大作作曲家であるが、同じボン生まれのアーベルはそのベートーベンのピアノ曲「月光のソナタ」を耳にした途端に故郷への思いが溢れ出し、これまでにない孤独感に襲われ、また一方森で迷子になった子供が母親に見つけ出された時のような思いに満たされ、激しく熱い涙を流さざるをえなくなったのである。「音楽が好きなんです。私もですよ」と人のよい若くはない理髪師の言葉に、我に返ったアーベルは取り乱した自分を「自分は年取った愚か者、センチメンタルなドイツの年老いた馬鹿者」と恥ずかしく感じるのである。

アメリカのこと知り、愛する代わりにここに座り、古いドイツロマン主義を回顧する愚かな涙を流す—あたかも、このロマン主義がどこへ人を導き、それが政治的に明らかになるとき、その結果がいかなる性質になるか知らないかのように。私はこの結果の犠牲者ではないのか。にもかかわらず、古く病的に擦り切れた魔法によって私は衝撃を受けたままになっている。恥だ！屈辱だ！心苦しいばかりだ！

これは我に返って自己分析するアーベルの描写であるが、自分がロマン主義の政治化の犠牲ではないかと自らに問いかけている点が特に興味深い。ロマン主義の政治化、言うまでもなくヒトラーのナチズムであるが、しかし一方、ロマン主義にナチズムの全ての負わせるわけにはいかない。ロマン主義は言わば両刃の剣である。ロマン主義はナチスの淵源になっているが、一方ではベートーベンのような作曲家を生み出しているのだ。しかし今、「月光のソナタ」を耳にして突然の涙にあふれたアーベルにはそこまで考える余裕はない。ロマン主義のネガティブな面に心を奪われているのである。そこで彼はこの章の最後で思い直して、過去を振り返るのではなく、未来に目を向けるのである。アメリカの西部中央には、彼から何かを学びとりたいと思っている、素朴で知識には欠けるが偏見がなくフレッシュで信頼できる学生たちが待っている、そういう学生を教育する機会をアメリカは彼に与えたのである。このことにアーベルは感謝して、本来孤独で憂鬱、脆弱な気質を克服して、アメリカ生活を始めようと自らを鼓舞するところで第1章は終わる。

2

第2章は、もう一人の主人公ともいうべきマーリオンの亡命のためのアメリカ上陸物語から始まる。この章の話を物語全体の筋から先取りしておおまかに見てみると、今見てきた先にアメリカに上陸したアーベル教授と後からきたマーリオンが出会い、婚約するというのが次の第3章の主な

内容なので、その間に挟まった物語と位置付けることができる。こういう大きな流れがあるので、これまで我々が見てきた第1章のアーベルのアメリカ上陸物語と比較してマーリオンの上陸物語を見ていくと二人の違いが色々浮き彫りになって大変興味深い。

そこでまず、マーリオンのアメリカに向けての洋上生活であるが、アーベルが孤独ではあったが洋上生活を十分に堪能したのに対して、マーリオンは海には幻滅を感じ、気を紛らせるための読書にも集中できず、もっぱら同船している人たちとの社交に明け暮れたのである。その中にはドイツからの亡命者もあり、ユダヤ人でありなが、第一次世界大戦後ポーランドやロシアから移住してきたベルリンのユダヤ人たちをジャーナリストや闇ブローカー、成金などの生意気な連中だと悪しざまに言う、不愉快なフランクフルトのユダヤ人夫婦がいた。

全く決定的だったのは、この旅が全然面白くないということだった。船は贅沢な鳥籠のように思われた。神経をいらいらさせて参らせ、毎日同じ、退屈する顔の表情を見なければならなかった。長時間の食事、単調なデッキの散歩、ピンポン競技でさえ、すべて拷問になった。彼女は子供がクリスマスを待ち望むように到着を待ち望んだ。ニューヨーク到着を。

このアメリカに向かうマーリオンは、洋上生活を愉しみ、ニューヨーク到着を恐れたアーベルとは全く対照的である。この違いはニューヨーク到着、その後の二人の生活にもはっきりと表れている。すなわち、ニューヨーク到着に際して、マーリオンは同じツアーリストの乗客ながら現地の歓迎の受け、彼女のヨーロッパでの反ファシズムの活動のこともあって、何人かのジャーナリストからなぜアメリカにきたのか、インタビューさえ受けて、彼女は「この巨大都市をすぐ我が家のように」感じたのであった。そして異文化不適應の症状を示してなかなかニューヨークの生活になじめなかったアーベルと違って、マーリオンはすぐにニューヨークという巨大都市の溶け込んでいったのである。その様子をクラウド・マンは手に取るように描いていくのだが、この二人の違いをマンは、伏線的人物をちょっと登場させて語らせている。それは最初に泊まった小さなホテルのバーの若いバーテンであるが、実は二人とも前後して最初は同じホテルにとまり、この彼と口をきいているのである。このバーテンの話によると、この夏、新しい環境になじめずに憂鬱そうな顔をして毎日バーに通ってきたドイツの教授がいたという。「ここは素晴らしいのに、ニューヨークが気に入らない人がどうしているのでしょうか」というマーリオンの反応に、「マダムにはあの教授より活気がありますよ」とマンはバーテンに言わせているのである。

しかし、このマーリオンのアメリカ上陸直後の高揚した気分、今バーテンが指摘した彼女の活気は、長続きしなくて、やがて幻滅がやってくる。彼女がニューヨーク生活を始めた頃は、やることなすこと全てが新鮮で感激の日々が続いていたのだが、やがてアメリカの生活に疲れてきて、幻滅

の時がやってきて、期待が大きかっただけに幻滅感も強かったとも言える。そうした時に、マーリオンは若い窓拭き職人、イタリア人トウリロ・ロッシィに出会うのである。アーベルは怪しげなナイトクラブに出かけ、なじめないニューヨーク生活の気晴らしをしようとしてうまくいかなかったが、マーリオンは、言わば向こうから恋人候補者がある日突然やってきたのである。物語は、マーリオンとアーベルの関係が次の第3章で問題になる前に、この若いイタリア人とマーリオンの愛物語が挿し挟まるような形で第2章で展開することになる。

ある日、「大きなバケツと沢山の布切れ」を持ってマーリオンのホテルの部屋にやってきたトウリロは、まだ22歳と若い上に優しく知的な美男子で、「この青年は若い神のように美しい！」と彼女はすぐに心を奪われてしまうのである。この愛物語は初め、年上のマーリオンが積極的で、その関係は一方的に始まったと言ってもよい。そして結論的には気が付いてみると、マーリオンがトウリロの子を宿すというところまで行ってしまうのだが、そこまで行くまでのプロセス、二人の心理状態をクラウド・マンは巧みに描き出している。このプロセスを見ていく上で、始めはマーリオンが恋の切っ掛けを作ったものの、これが二人の間で共有のものになる上で、大きな役割を果たした中に反ファシズムという、共通の政治的要素が含まれている点が注目すべきである。つまり、このトウリロという青年は、今は窓拭き職人として単純労働に従事しているが、彼の本来やりたいことは詩を書いたり、戯曲、新聞記事を書いたりする文筆業で、事実、彼の投稿記事がすでにニューヨークのイタリア系の新聞に掲載されたこともあるというのだ。その内容は、イタリアファシズムに反対する政治的な記事だったという。恋の最初の切っ掛けがトウリロの男としての外観であったにせよ、マーリオがこの恋にさらにのめり込んでいったのは、彼の反ファシストとしての側面、彼の内面にあった点は見逃せない。その意味でまだ顔を合わせた最初の日、まだお互いを知らない時に二人の間で交わされたファシズムを巡る以下のような二人の会話のやり取りには興味深いものがある。

その二人のやり取りを要約してみると、まずマーリオンのファシズムに好意を持っていないかの問いに対して、「もちろんないです、どうしてそんな質問をするんですか」とトウリロは彼女に食ってかかり、イタリアでの出来事は悲惨で反吐が出そうだと芝居がかった振る舞いで彼は拒否反応を示す。イタリアでは言論の自由はなく、稼ぐこともできず、若者は戦場に送られるが、自分はずでにアメリカ国民だからそれは及ばないという。この会話の後、トウリロは机の上にドイツの本があったからドイツ人かとマーリオンに尋ね、彼女がそうだが、ドイツに長い間住んでいないと答えると、なぜと彼は問い、彼女もドイツのファシズムをおそらく全くは同意していないのでしょうか、ドイツのファシズムは、悪いローマの発明品のみじめなベルリン版のコピーって言われているのではないかと挑発する。もちろんナチスには反対とマーリオン言って、今度はどちらのファシズムがよりひどいかと「フランスのパスポートを持っている国籍を剥奪されたドイツ女性とアメリカ市民で

ある亡命イタリア人男性」が自国の独裁者をののしるのである。相手方ではなく自分の側をののしるこの奇妙なやり取りを「倒錯した国家の名誉欲」と作者マンは表現しているが、このやり取りが二人の距離を一気に縮め、二人を近づけさせる切っ掛けとなったのである。

具体的には、次の朝も「床をびかびかにするために」彼は彼女のところに再び現れ、その日の別れに際して、「いつ私たちは会いましょうか、どこで？」というマーリオンの誘いの言葉で、この二人の愛の関係は始まるのである。この二人の関係はこの時以来、マーリオンが講演旅行に出かけるまでの三週間、主に昼はそれぞれ仕事をし、夜になって会い、愛の時を過ごすという形で、途中紆余曲折はあっても、最初の内はおおむね順調に展開していくのだが、ただこの関係を不安定にし、脅かしている複雑な要因がその背景にある点も見逃すわけにはいかない。それは今マーリオンは確かに、イタリアの美青年トゥリロに一目惚れに近い状態で恋に陥り、恋ならではの幸福感を味わっているものの、彼女の心の奥底には、死んだ夫マルセルが生きているからである。

彼女はマルセルのことを考えた。目を閉じると、彼女の傍らに生きている男の顔よりも多く遠くで死んだ男の顔に似ている顔が現れた。しかし両者の顔があった。彼女はマルセルに謝りを乞うた。彼女は彼に約束した。〈私はいつもあなたを愛しています。たとえ私に何が始まろうと、あなたから私を引き離すことはできません。私の心の中には、聖痕のようにあなたの途方もない視線の痕跡が残っています。私はあなたの未亡人です、マルセル。〉

この引用箇所には、過去の愛を重く引きずったマーリオンの今のトゥリロへの愛に潜む、複雑でこの愛の行方の不安定さを予測させるような悲劇的要素を感じさせるものがある。

こういう一文に接すると、マーリオンのトゥリロへの愛とは一体何なのか、亡き夫との関係で言えば、一時的にせよ、夫を裏切る激しい情熱と言うことができよう。しかしこのように言わばモラルとして問題のある彼女のトゥリロの愛で注目すべきは、彼女のその愛が同時にマルセルへの愛につながっていく要素があるという点である。つまり、彼女がトゥリロに心惹かれる過程をよく見ていくと、見逃せないのは、外見を含めて亡き夫マルセルに彼が似ている点が多いということである。彼女はまずトゥリロの目の形と色に亡き夫を思い起こされ、その眼の生き生きした輝きに亡き夫が若返ったような錯覚にも似た思いでトゥリロに惹かれていくのである。しかし似ているのは眼だけではない、眼の光を通して見えてくるトゥリロの内面である。二人ともファシズムに対して反感を抱き、行動を通して反ファシストたることを証明しようとしていることが似ていて、そこにマーリオンが内面的に更に深く惹かれていくという構造であり、その点にまたこの愛物語の共通の悲劇性が生じてくるということである。つまり、反ファシストたらんとしてマルセルがスペイン市民戦争に参加しようとする行動を起こした時に、二人の関係に別れが生じたように、トゥリロが窓拭き職人を

やめて戦うためにヨーロッパに向かう時、二人に別れが待っていたのである。

このマーリオンが惹かれたマルセルとトゥリロ、二人はペン、あるいは窓拭き職人という職業を捨てて、ファシズムという大義のために行動に走るに至るという点は酷似しているが、トゥリロの方が若いこともあり、その理由づけに素朴で純粋な面がある。彼があるときマーリオンに吐露した人生観からわかったことは、彼が反対しているのは組織化した権力、国家ばかりでなく、理性、頭脳、思考そのものであるということである。彼によれば、人間は余りにも多く考えすぎる故に、幸福になることができなかつた。彼の理論によれば、全ての病気は脳髄からくる、取り分け結核からくるという。この害悪に対してはあれこれと考えることを諦めてこそ、最も効果的に戦えるという。この素朴な理論は「私は無学です、しかし真理を知っています」というトゥリロのものであるが、それに対してマーリオンは「彼の幼い未熟な思考力も時代の強力な危険な傾向、雰囲気によって触発されたもの」と見なし、その根底では、トゥリロよりもはるかに知性溢れていたが、大言壮語を呪って行動、犠牲を求めた亡き夫マルセルと共通のものを見出すのである。その上でマーリオンが次のように自らにも投げかける問いは興味深い。

この理性への倦怠感、知的批評へのこの攻撃的な疑いは私たちの世代の病気のように見える—あるいはこれはむしろ健全化への兆候なのであろうか。これら若者たちの全ては何か信じることを欲する故に、思考と疑うことに大変疲れてしまっているのではなからうか。

しかし、とは言っても見逃すことはできないことは、理性に疲れ、思考の停止を叫んでいるようなトゥリロであっても、彼がファシズムを憎み、この間違った秩序と戦うために、より理性的で自由である、よりよい別の秩序を望んでいるということである。そして以下のように方向づけるマーリオンの考えは重要である。

私たちの世代は、こう感じている。永久に続く不正よりもカオスを望む。カオスの背後にしかし、それとはまだわからず認められないのであるが、すでに私たちの世代が仕えたいと思う新しい秩序を見ているのである。

この引用箇所は、行動をすでに起こし、またこれから起こそうとするマルセル、トゥリロの二人の行動について考えた結果のマーリオンの思いであるが、同じ世代として行動を起こしている彼女自身の問題でもあるが故に、このカオスの背後、その先に新しい秩序を彼女が見ていることは重要である。なぜなら、この希望なくして人は行動を起こせないからである。この希望を共有しない限り、ファシズムとは戦えないからである。その意味で、この箇所はこの物語がトゥリロとの恋

愛物語でありながら、反ファシズム小説としての一面を強く押し出している箇所でもあると言えよう。

この愛の物語の展開は最初の内は、毎晩のように二人は晩に会い、またトウリロの案内でマーリオンはニューヨークの街の魅力に引き込まれていくのだが、しかしすでに見てきたようにこの二人の背後にはもう一人の男マルセルが死んだとは言え、マーリオンの心の中に生きているために、一時的には二人の間に愛が燃え上がり、幸福感を味わったとしても、二人の関係は不安定であり長くは続かないのである。愛し合っている最中でも「君は幸福なの？」とトウリロがマーリオンに問いかけ彼女の本心を知りたがったり、マーリオンもマーリオンで自分は幸福なのかと自分に問いかけたり、二人の愛の關係の危うさを作者クラウス・マンは巧みな心理描写で描いている。そしてこの愛の危うさ、二人の間の關係の溝、亀裂を暗示するものとして、クラウス・マンはマーリオンとマルセルの愛の物語ですでに用いたあの火山のメタファーをここで用いるのである。³⁾

… マーリオンとトウリロは、彼らの前に突然深淵が生じたかのようにぎょっとした目をした。深淵から火炎が立ち上り、苦悶も煙の塊になって沸き起こり、岩塊が空へ高く投げつけられた。それは火山の噴火口であった。

火山はこの長編小説のタイトルであるとともに、マーリオンとマルセルの物語ですすでに見てきたように二人にとって危機のメタファー、別れのメタファーでもあった。「僕は君のもとに留まることはできないんだ」とトウリロはついにマーリオンに別れの言葉を発する。なぜならここでの窓拭きの生活では彼は満たされない、彼にはヨーロッパに行ってファシズムに反対するために働く課題と義務があると言うのである。そのためには犠牲が必要で、犠牲が要求されると言うのである。そこまで思い詰めて言われれば、スペインに赴いたマルセルの場合と同じく、マーリオンには若いトウリロを止める手立てはない。別れが現実になる他なかったのである。別れは両者にとって辛かったが、マーリオンはその傷をアメリカ各地への講演旅行、一種の反ファシズム活動に従事することで癒そうとしたのである。

第2章の最後の箇所は、このマーリオンの講演旅行の様子の記事が中心になり、その最後の場面でアーベル教授が登場、第3章につながっていく。物語の展開上、この最後の場面が重要なので、そこを中心に見ていく。マーリオンの講演旅行は、ドイツの作家の作品朗読と語り、その講演のス

3) 拙稿「クラウス・マンの闇と光—亡命小説『火山』をめぐって(その3)」経済論集 東洋大学経済研究会 第35巻第2号 2010年(135頁)及び拙稿「クラウス・マンの闇と光—亡命小説『火山』をめぐって(その4)」経済論集 東洋大学経済研究会 第36巻第2号 2011年(131頁)参照

タイトルのアメリカにはない斬新さと反ナチスを真摯に聴衆に訴える彼女の姿勢がアメリカ各地で好評をえたのである。その積極的な反応は講演後のドイツの現状に対する各種の素朴な質問によく現れ、ドイツの現状を知らないアメリカ市民に対して講演旅行は啓蒙の役割を果たしていったのである。その様子がここでは生き生きと描かれているのだが、しかしこの成功したかに見える彼女の講演旅行も注意すべきは、これを企画したのはほとんどアメリカ人たちであって、ドイツ人たちのグループではないということである。それに対してマーリオンは、「私の同国人たちはここでもヒトラーに支配されているのかしら」と疑うほどだったが、これは当時のアメリカ在住のドイツ人たちの複雑な一面をのぞかせていて興味深いものがある。

それはともかくとして、マーリオンは乞われるままに次々とアメリカ各地を主に列車で移動し、講演を続け、また各地の新聞社からインタビューを受け、反ファシズム講演活動をしていくわけだが、この物語の最後にとある小さな大学の講堂で、「ドイツの昨日、ドイツの明日」と題して講演を行った時のことである。講演終了後いつものように、討論の時間があり学生からの質問が多く出たが、なかに明らかにマーリオンを陥れようとする悪意のある質問をした学生がいたのである。その学生は最初はマーリオンの講演をドイツ文化の偉大さを知っている人の講演だと持ち上げておいて、次に彼女の講演の反ファシズム的内容の政治的部分については次のように疑いを差し挟んだのである。

反ファシズムを熱狂的に信奉する人たちに接して、他の多くの信奉者たちに対してと同様なのですが、才能のある講演者の話を拝聴して僕を驚かせたことが一つだけあります。ドイツ帝国では気に入らない出来事や制度がソビエトロシアでは許すことができるのでしょうか。

これは確かにマーリオンを罠にかけようとする切っ掛けを作る狡猾な質問である。この学生はこの質問を皮切りに、ボルシェビキの独裁はもはや卓越したものではなく、悪を冒す過ちを犯したのではないかと問いかけ、ソビエトロシアには言論の自由があるのかと問いを畳み掛けたのである。この問いを自分はファシストではないと断りながら、彼が主張したのは、同じ独裁体制なのにドイツを非難し、一方ソビエトロシアを擁護するのはアンフェアではないかと言うことであつた。このことを講演者に対して礼を失するほどの態度で言わば上から目線で言ったために、聴衆の同情は得られなかった。しかしその質問内容には座視できないものがあり、マーリオンは急ぎ答えようとするが、眩暈に襲われ、言葉が出ず窮地に陥った。このマーリオンの窮地を救ったのが、他ならぬアーベル教授だったのである。

我々の大学の名前においてカンマー嬢(マーリオン、筆者注)にお詫び申し上げますのが、まず最初の私の義務と思われまます。

マーリオンをじっと見つめながら、アーベルはこう切り出して、問題の学生に対してその横柄な態度を非難し、君の方こそアンフェアだと反駁したのであった。この悪意ある発言をしたのは、ベルリン出身のドイツ人留学生であった。だからこそアーベルは同国人として彼の逸脱した発言に注意を促したかったのである。

フレリッヒ君(質問したドイツ人留学生、筆者注)は、さっき<アンフェア>という概念を使いました。ヒトラーの信奉者のためにこの言葉がそもそも意味と内容を持つとは驚きです。我々他のものにとってはもちろんその言葉は重要な意味があります。

これはアンフェアという言葉を使ってマーリオンの反ファシズムの講演内容について疑義を差し挟もうとする狡猾な学生に対する警告の言葉であるが、ドイツのヒトラーのナチズム批判が問題になっているときに、中立ということはありません、この学生がいくら自分はファシストではないと断っても、この状況でソビエトロシアの問題を引き合いに出すことは、結果的にはファシストに加担していることになるのである。アーベルはこのことを自分の言葉で力説して聴衆の注目をえ、マーリオンの言いたかったことを代弁し、マーリオンの窮地を救ったのである。この様子を作者クラウス・マンはこの最後の場面で実に生き生きと巧みに描き出している。

3

第3章は、講演会でのマーリオンの窮地を騎士的な態度で救ったアーベル教授のマーリオンへの求愛・婚約がメインテーマとなるが、しかしそこに辿り着くまでにはまだ紆余曲折があったのである。アーベルの機転で講演会での気まずい雰囲気が一掃された場面の次に、話の舞台はその後開かれたその町の郊外にあるピジン氏夫妻の家に親しい人だけが招待されたパーティに移る。ここの場面で登場するのは、ピジン氏夫妻の他、アーベル、アーベルを招聘した大学の上司の教授のフランクリン・シュナイダー博士、大学付属の小さな美術館の若い館長のジョニー・クラーク、そしてマーリオンである。初めのうち、マーリオン、シュナイダー教授、ピジン氏は部屋の片方の隅、クラーク氏とアーベルはもう片方の暖炉と分かれてそれぞれ談笑している。これらの人物で物語の進行上、重要なのはもちろん、アーベルとマーリオンであるが、そこにジョニー・クラークが一枚絡んでくるのでその展開は複雑になる。つまり、マーリオンを巡ってアーベルとクラークがちよっとした三角関係になるからである。マーリオンを求めての老若の男二人の心理的な駆け引き、結果的には年配のアーベルがマーリオンと婚約することになるのだが、そこまで至る展開がなかなか複雑なのである。

クラークのマーリオンへの近づき方は、若者らしく率直でマーリオンの講演に感激して、彼の主

催す次の日の戦争反対のプロパガンダが内容の戦争展覧会への誘いかけから始まるのであるが、マーリオンも褐色に日焼けしたスポーツマンのような若いクラークに好感を抱く。これに対してアーベルには、講演会では騎士的な振る舞いでマーリオンの窮地を救ったものの、その後のアーベルの彼女への接し方はクラークよりも冷やかなものが感じられたので、彼女には不愉快な気持ちの方が先立ったのである。つまり、マーリオンは講演会でのアーベルの騎士的な振る舞いにまだお礼を言っていないのに気が付き、暖炉の方へアーベルに対してお礼の言葉を述べようと近づいた時、ふらっとして両手をテーブルについてその上の灰皿をひっくり返し、一瞬椅子に倒れた。それに対して「そうなるのはよくわかります。あなたは演壇上であなたの力を使い果たしたのですから—誰しもわかっています。素晴らしいが気がかりでもある演出でしたが」とアーベルは声をかけたのである。この「気がかりな」《beunruhigend》という表現にマーリオンは傷ついて、彼女のお礼の言葉が儀礼的でぎごちのないものになり、その場の空気が気まずいものになったのだが、この空気を救ったのは、とにかくマーリオンの講演は素晴らしかったと熱狂的に褒めるクラークの振る舞いであった。このクラークの反応に驚き、内心二人が近づくのを恐れたアーベルは次のように言うのである。

カンマー嬢(マーリオンを指す、筆者注)の朗読には手に汗を握るようなものがあります—確実に沢山あります。でもこの興奮は決して純粋に楽しめるようなものではありません。—あなたはアジテーターです、お嬢さん。

このアーベルのものの言いようは、前出の「気がかりな」という表現と同様、マーリオンに心酔している若者クラークの言葉とは一見して違い、マーリオンの講演に対して両者の間の受け取り方に距離が感じられ、見方によっては先ほど、マーリオンの講演内容に言いがかりを付けたドイツの留学生に対して騎士的な振る舞いでマーリオンの窮地を救った者の言葉としては、不可解な言動にさへ思われるのである。マーリオンはこれに対して「何のためのアジテーターというのですか」と、質問すると、「善のため、正義のため、美のため」とアーベルは答え、「だからこそアジテーター的身振りは、妨げになり」、それは敵の側によりよく合うものであり、「我々は戦いにおいていつも敵のレベルと一致するような危険がいつもあるのです」と警告するのである。しかしそれに対してマーリオンが、「それではあなたは、私が講演をナチのレベルで始めていると思っているのですか」と問い返すと、「そんなこと思ったことはありません。あなたは私がそんな馬鹿げたこと思いついたとでも思っているのですか」と直ちに打ち消す始末で、アーベルの言っていることにはちぐはぐなところがあるが、それにもかかわらずこれ以後マーリオンに対して「アジテーター」を巡って大いに熱弁をふるうのであるが、それはまさに雄弁な大学での講義のような調子になる。

どのアジテーターにとっても、証人として引き出す偉大な価値や人物は、目的のための手段になります。アジテーターは、手段のため、あるいは手段のみのためにだけはもはや手段そのものを愛さないのです。彼は、手段が目的に役立つ故にそれを名指しし褒めるのです。ある詩的作品の名声と豊かさも、そのようにして〈目的物〉に雇われるのです。それは、ヴィジョンからスローガンが生まれ、非常に複雑なものも単純化され、レベルが下がり、敵のデマゴギーのレベルと一致するようになることを意味します。一我々は一体全体、とりわけ全体主義的ファシズムの間違ったイデオロギーと陰険な行動の何を憎んでいるのでしょうか。真理の凌辱です。つまり、それは精神の尊厳を傷つける行為であり、人間の尊厳を傷つける行為に他ならないからです。ファシズムは精神に対して、常に全力で国家のプロパガンダの意図に奉仕するよう要求します。僭主政治のプロパガンダの道具としての精神—これは精神の尊厳を究極的に傷つけるものです。もし我々が精神的価値というものが、今日性を忘れていて、不滅なもの、失われることのないもの、美しい人間性を代表している故に、今日の議論の中で、それを愛する代わりにレトリックとして〈利用〉するなら、精神の尊厳を傷つける準備することの共犯になるのではなからうか。

この雄弁なアーベルの口調に、マーリオンは自分を傷つけるためにあえてそう言っているのか、逆に自分に対する求愛の形なのか、思い悩む。そして彼女はこのアーベルのアジテーター批判には感情的には対応しないで、彼の語った言葉から反ファシズム活動にとって重要な言葉を引き出し、それが彼女の講演活動の基盤になっているということを彼にも理解させようと努力するのである。つまり、アーベルが言う「美しい人間性」などは、今日のドイツでは全く失われ、ファシズムと「美しい人間性」は一致していない、これはあなたが強調されたことであるが、だから私たちはファシズムと戦っているのですとアーベルに同調を求めるのである。この「美しい人間性」を擁護するために私は偉大な人たちの作品を朗読するのです、と答える。その彼女の落ち着いた堂々とした答えを聞いていた周囲に人々、ピジン氏夫妻、シュナイダー教授、クラークなどが大変感銘してマーリオンに拍手喝采をしたのであった。しかし問題はこれで二人の論争に決着がついて一件落着かという、そうではなく、若いクラークがマーリオンの答に満足感を表わすほど、老いたアーベルは、ますます意固地になって更に自説を主張し続けるのである。このアーベルの雄弁の背景には、このような恋の駆け引きがあるために、彼の発言の真意がどこにあるのか、解りづらくなっている面は否めないが、ともかくもマーリオンの講演に対する否定的なアジテーター論はさらに続くのである。それに対してマーリオンは今、要請されているのは、自分たちの立場の道徳的、知的概念の分析でなく、むしろ自分たちの立場の積極的な弁護であるとアーベルに反論する、戦闘的な立場であった。この二人の論争に、シュナイダー教授やクラークもそれぞれの立場から参戦しようとするのであるが、夜も更け、議論を活気づけるウィスキーももはや底をついたというわけで、パーティ

はお開きとなる。

このパーティの後、ホテルまでマーリオンを車で送ったのは、若いクラークであったが、彼がホテルのバーでさらに飲もうとの誘いは断ったものの、パーティの最初に持ち出された明日の博物館案内の彼の誘いには、彼女は当日ニューヨークに旅立つ予定を忘れて応じてしまうのである。そしてクラークと別れた後、マーリオンはこの日起こった一日の出来事を思い起こし、なかなかすぐには寝つかれなかったのである。この回想場面で物語の展開の上で重要なのは、アーベルのことは別として、今日知り合ったばかりのクラークとの関係の深入りしないことを決心したことである。マーリオンのもとを去ったトゥリロとのことが、急に思い出され、また現実のこととして彼の子をすでに宿したという予感をこの場面で作者クラウス・マンが初めて彼女に与えていることも見逃せないところである。

次の朝早くアーベルが花束を持ってマーリオンの泊まっているホテルを訪ねる。昨晚自分がしたことは全くばかげたことだったとお詫びの訪問である。しかしマーリオンは、「行き過ぎて不適切な主張の中にも、抜け目のないもの、正しいものもあります。いくつかのものは厳密に考えて肝に銘じたいと思っています」と答える。なぜアーベルが朝一番に謝罪にマーリオンのもとを訪れたのか、昨晚クラークがマーリオンを車でホテルまで送って行ったことを彼はよく知っていた。昨晚のアジテーター論の続きではなく、その全面撤回の思いを抱いて謝罪に来たアーベルの行為の背景には、若いクラークのことが気になったということもあるかもしれない。ともかくもここまでくると見えてくることは、マーリオンにとっては時に侮辱と思われた昨晚のアーベルの彼女の講演への執拗な批判的言動も、裏返せば彼女を引き付けるための愛のゆがんだ表現であったということである。それに対してこれから展開される物語は、アーベルのマーリオンへの正面からの求愛物語である。とは言えこの求愛物語の一筋縄ではいかないのは、これまで見てきたように愛を求められるアーベルも年を取っているという負い目を抱えているのに対して、愛を求められるマーリオンの方も、若いとは言え、夫の故マールセルの未亡人にして今は別れたばかりの愛人トゥリロの子を宿す身であり、アーベル以上に複雑な状況にあり、この愛の行方はそう簡単には先を読めないのである。

そこでこの愛の行方を少し追ってみたいのだが、ともかくも昨晚クラークの誘いに応じてアーベルが謝罪に訪れた日にマーリオンがニューヨークへ旅立たなかったことが、この愛の行方を暗示するものであった。この先思い立てば何回も旅立つことができたのに、ついしばらくこの小さな大学町にマーリオンは今では休暇と言って講演旅行の始まる1月半ばまで滞在することになったのである。初め自分のために留まったのではないかと考えたクラークは、しかし同僚のアーベルがマーリオンに対して何を思っているかわかった瞬間に、潔く身を引いたので、アーベルの方は逆に彼のことをドイツにはいない素晴らしい青年だと褒めそやすに至るのである。この褒めそやす程度がはなはだしいので、マーリオンが「あなたはこの若者に全くほれ込んでしまっていますね」とアーベル

に言うと、「あなたがもはや彼のことをほれ込まなくなったからですよ、マーリオン」と彼は真顔で答えた。これに彼女は応じなかったので、思わず彼は赤面するわけであるが、この状態を打開するために次に彼がしたことは、彼女と共有する問題、反ファシズムについての自分の考えを滔々と述べ始めたことである。その中で社会主義、いやそれを越える世界共和国のユートピアのについて語り、その夢を力強く語ることによって、言わばマーリオンの心を惹きつけようとしたのである。昨夜は、マーリオンの講演会をプロパガンダ的と非難したアーベルが、今日は逆転して自らが彼女に個人的にはあるが、皮肉にもプロパガンダ的に自分の夢をマーリオンに語りかけたと言ってもよいであろう。そのプロパガンダは果たして彼女の心を捉えたのであろうか。結論的に言えば、こういう手段で彼女の心を捕らえるには、先に述べたように彼女の状況が余りにも複雑だったのである。彼女の心を惹き付けるには、別の手段、別の局面が必要だったのである。

彼(アーベル=筆者註)は、決心した：明日、私は自分が感じ、望んでいることを告白しよう。クリスマス最初の祝日は、大きなことを告白するには最も素晴らしい日付だ。

その局面は、クリスマスという特別な日に、しかもある覚悟をもってアーベルがマーリオンの宿を訪ねた時に打開の糸口が見えてきたのである。ある覚悟とは、今掲げた引用文にあるようにもちろん愛の告白であるが、それを彼はこれまでのような言葉の遊び、つまり雄弁な演説のような間接的なものではなく、行動で直接的に彼女に示そうとしたのである。それに対して彼女が受け入れるかどうかは不明なので、彼の行動には一か八かの掛けの要素があるので、物語は読者にとって嫌が上にもスリリングな要素があり、この展開を作者クラウス・マンは実に巧みに面白く描いていると言ってよいであろう。つまり、この覚悟を決めた日のアーベルの行動は、これまでの余裕のあった彼の言動とは別人になったようにぎごちないものになり、雄弁はどもりにかわり、愛の告白はマーリオンの前に跪き、愛を懇願するという見方によってはグロテスクな形をとるに至ったのである。愛という情熱を前にしては、年齢も、教授という肩書も、知識も教養も関係ない、ただただマーリオンを自分の妻にしたいアーベルの行動、土下座までして彼女を獲得したい彼の切実な思いは、本物であればあるほど、一方ではグロテスクで、奇妙なものに見えてくるという描き方をクラウス・マンはしている。ただし、グロテスクと言っても、ドイツ映画『嘆きの人』の主人公の高校教師が、マレーネ・ディートリヒが演ずる踊り子への愛故に滅亡していく程の悲劇性はない⁴⁾。アーベルの

4) 映画『嘆きの天使』《Der blaue Engel》は、監督スタンバーク、高校教師役はヤニングス、踊り子役マレーネ・ディートリヒのドイツ初のトーキ映画である。(1930年)内容は、老高校教師が、酒場で働く脚線美の美しい踊り子の魔力にとりつかれて、彼女と結婚、教師から旅回りの道化師に転落していくグロテスクな悲劇物語である。原作は、クラウス・マンの叔父ハインリヒ・マンの『ウンラート教授』《Professor Unrat》(1905)

行動は、あらゆる面から見て確かに異常には違いないが、しかし彼にはそれでも受け入れてくれるマーリオンがいたからである。ただこれにすでに指摘しておいたように、マーリオンにはマーリオンの事情があったことを忘れることはできない。

すなわち、土下座までしてマーリオンに迫ったアーベルに対して、彼女は最初は彼の申し出を断ったのである。なぜとしつこく追及されて、「私は妊娠しているのです」とついに告白する。普通の男ならそこで断念するのだが、アーベルは「誰の子ですか」とさらに問い若いイタリア人窓拭き職人トウリロとの子であることを聞き出す。そしてマーリオンが彼と別れ、今は独り身であること知るとほっと肩の荷を下ろすのである。

今やその子には一人の父親がいます。—あなたの子は私の名前をもつことになるでしょう、マーリオン！

このアーベルの一言で、マーリオンは今のアーベルの彼女への愛の真率さと深さを知り、彼の愛を受け入れるのである。そこに至るまでの愛する側と愛される側の心理的葛藤を作者クラウス・マンは実に巧みに描き出している。

こうして婚約まで漕ぎ着けた二人の関係を見てくると、老いたアーベル、若いマーリオンと年齢差はあるものの、ともに過去に傷をもつ同士で、ナチスに追われている亡命の身で、アメリカで出会って結ばれたということになるが、反ファシズム小説という面から見ると、強弱の差はあれ、ともに反ファシズム、反ナチズムという政治的な姿勢の背景があり、そのことが二人を同志的結合という形で結びつけていると言ってよい。さらに言えば、愛の形としては、老いた男の求愛を若い女が受け入れるという形をとっているが、それを可能にしたのは、共に傷をもつ過去ではなく、過去はどうであれ、共に反ファシズム、反ナチズムという活動を通じて未来を見据えて戦う姿勢である。特にこの戦う姿勢に関しては、これまで見てきて明らかなように若いマーリオンの方が年老いたアーベルより、積極的で戦闘的であった。その点にアーベルは自分にはないものを見出し、惹かれたということができよう。これまでのアーベルの女性との関係は、アンネットにせよ、シュティンヒェンにせよ、女性としての魅力に惹きつけられてきたのに対し、マーリオンに対しては、無論女性としての魅力に惹きつけられている面があるにせよ、それ以上に彼女の生き方、特に反ファシズム、反ナチズムの活動の積極的姿勢に強く惹かれている点が見逃せない。それは当然のことながら、

であるが、映画の内容は原作とはかなり異なった部分がある。詳しくは『ウンラート教授』（今井敦訳、松籟社、2007年）の作品解説を参照されたい。尚、筆者はこの詳細な作品解説のついた訳書について書評しているのも参照されたい。（『週刊読書人 第2717号 2007年』12月14日）

アーベルのこれまでの生き方をも変えざるを得ない。その意味では、この二人の関係は、年老いたアーベルの方が、若いマーリオンの生き方からより強い影響を受けて結ばれた関係と言えようが、注目すべきは、現在のマーリオンが胎内にトウリロの子を宿し、弱気になり、どうしても過去に捉えざるを得ない身の上なのに対して、逆に彼が彼女を励まし、生きる勇気を与える立場になっている点である。この逆転現象が起こったのは、この二人の関係においては、終始積極的なのはアーベルの方であり、彼の主導でこの関係が築かれてきたことに原因があると言えよう。アーベルは、これまでのマーリオンの恋愛体験を本人から直接聞き、彼女の愛には男が女を愛するような男性的な面があり、これは実験的な面が強く、大変危険であったとネガティブ面を強調する反面、そこから生じざるを得なかった愛の苦悩によって彼女が成熟したとも評価する。そして注意すべきは、彼との出会いによって「何か新しいことが始まるのです！」と感動して彼女に言ったことである。この新しいことの中には、今度はマーリオンが女性として愛されること、そして単なる男女関係ではなく、それを超える反ファシズム、反ナチズムを目指す同志的な精神的絆を求めるアーベルの熱い思いが込められていると言ってよい。この思いを最初はかたくなだったマーリオンは、最後には受け入れたのである。その結果、妹のティリは、宿した子を墮ろし、身を滅ぼし悲劇的な結末を迎えたが、姉のマーリオンは、アーベルの愛を得て、子を産む決意をして妹の悲劇を乗り越えようとするのである。

第3章は、この二人の男女が共同の道を取り始めるところで終わるが、一つのエピソードとしては、大晦日の晩でのアーベル教授宅で開かれたパーティで、その中で彼がマーリオンのために、新年と婚約祝いとして事前にチューリヒのマーリオンへの母に電話をつないで彼女を驚かせるというサプライズのプレゼントが披露される。その母への電話で、彼女はクリスマスにアーベルと婚約したことを報告し、母を驚かせるのである。第3章はこのパーティの詳しい様子や、さらにこの地に留まって共同生活を始める二人の姿を描写するところで終わる。

(続く)

参考文献

- 1) Fredric Kroll: KLAUS - MANN - SCHRIFTTENREIHE BAND5 1937-1942 TRAUMA AMERIKA, Edition Klaus Blahak · Wiesbaden, 1986
- 2) Nicole Schaezler: KLAUS MANN Eine Biographie Campus Verlag Frankfurt/New York 1999
- 3) Uwe Naumann: KLAUS MANN Rowohlt Taschenbuch Verlag GmbH, Reinbek bei Hamburg, 1984
- 4) Carol Petersen: KLAUS MANN Morgenbuch Verlag 1996